

奥田隆一先生へ長く変わらぬ感謝を込めて

学部長・研究科長
今井裕之

奥田隆一先生は、外国語学部が創設される1年前の2008年に、当時の外国語教育研究機構に教授として着任され、15年間に渡って研究と教育に多大なご貢献をされました。外国語を学ぶすべての学部生たちの礎となる1年次科目「ことばの世界」から大学院の言語観を磨く「外国語分析論」「外国語教育論（文法）」まで広く講義担当され、多くの学生たちを育てて、本年2023年3月31日をもってご退職されます。言語学の研究や講義をされる一方で、外国語教育における言語分析力や言語学知識の重要性を、学生たちに面白くも厳しく解き続けてくださった先生に影響を受けた学部生や大学院生たちがたくさんいます。奥田先生がご退職の日を迎えるにあたり、強い寂寥の念と同時に深い感謝の念を禁じ得ません。

個人的な思い出話で恐縮ですが、奥田先生に初めてお会いしたのは、1990年代に長野県白馬村で行われていた白馬言語学会でした。この会は大学教員や学生たちが八方尾根の麓の民宿に泊まり込み、白馬村役場を会場に何日間にも渡って「言語学を心底楽しむ」学会で、まるで大がかりなゼミ合宿のような時間でした。私は当時まだ20代後半で、専門分野違いのかけ出し研究者がおそろおそろ参加している感じでした。参加者が互いに分け隔てなく声を掛け合うとても和やかな雰囲気の中でホッとした頃、その中でもひとときの笑顔とお声で楽しそうに議論されていた人に気づいたのですが、それが奥田先生でした。その後の学会等でお会いした時にも気さくな笑顔と語りで接していただき、率直で思いやり深いお人柄を感じました。今も奥田ゼミは六甲山荘等でゼミ合宿をされていることを先生のゼミ生と話していて知りました。言語学を（真剣に）楽しむことを学生に伝える指導者としての姿勢は、あの時の白馬と今の六甲とで、時と場所を隔ててもずっと変わらない先生の教育者としての軸なのだろうと思います。その変わらぬ軸があるからこそ、その先生のゼミ生の話を「そうそう、わかる～！」と30年以上を経てなお、深い共感を持って聞くことができました。

奥田先生には、長い間、入学前教育や寄附講座のコーディネータもご担当いただきました。尚文館や法文坂でたまたまお会いした時にも、学生のことについてよくお話しをうかがいました。「この学生には何度も指導して追試しているけれど合格しないんだ。入学してからが心配だ。」と語る先生の入学前教育に対する信念と粘り強さに脱帽でした。また、寄附講座のコー

ディネートも然りで、私が引き継いだ際に、読売新聞の担当者から長年奥田先生にとっても丁寧に支援してもらったと伺いました。相手を選ばず誰にも真摯に向き合う先生のお姿が目につきました。私にとっては「軸のブレない教育」は目標であり、最大の敬意であり賛辞です。奥田先生長い間変わらぬご指導本当にありがとうございました。